

玉川学園・成城学園・成蹊学園訪問 報告書

一貫連携教育研究所員 表 弘之

はじめに

1. 全体の行程について
2. 玉川学園について
 - (1) 総合学園としての取り組み
 - ①小中高の12年間をどう区切るのか
 - ②玉川学園が444制を敷くにあたって
 - ③教員免許の問題解消法
 - (2) 内部進学について
 - (3) 今後の展望について
 - (4) その他
3. 成城学園について
 - (1) 総合学園としての取り組み
 - ①「オール成城」として行ったオープンキャンパス
 - ②教育研究所の活動
 - ③自校教育について
 - (2) 内部進学について
 - (3) 今後の展望について
 - (4) その他
4. 成蹊学園について
 - (1) 総合学園としての取り組み
 - ①企画室の活動
 - ②小中の内部進学担当者会議
 - ③各校の国際教育への人材派遣
 - (2) 内部進学について
 - (3) 今後の展望について
 - (4) その他
5. 今後の取り組み

はじめに

2016年には大学創立50周年、2018年にはこども園5周年、学院・小学校130周年と大きな節目を迎える。また、その後も2019年には幼稚園50周年、2020年には両中高70周年と伝統ある総合学園としての周年記念が目白押しの状況にある。これは、先輩教職員の努力の賜物であり、その後続くわれわれにとって、真に誇りにすべきことである。

ただ、残念なことに、総合学園としては現在十分に機能しているとはいえない。しかし、2008年の学院設立120周年を境に急速に総合学園としての取り組みが行われるようになってきた流れを引き継ぎ、さらなる今後の発展に繋げていきたい。

「中期経営戦略書(2013～2015)」には4つのミッションが掲げられている。そのうちの【ミッション3】には各校の教育を、幼稚園から大学院、そして卒業後までもカバーする「一環連携生涯教育システム」として連結・統合し、「追手門学院スタンダード」を確立するとある。これは総合学園としての追手門学院を見据えての提言である。

一方で、【ミッション1】「追手門学院大学の競争力再生」【ミッション2】「併設校の競争力強化」に象徴的に示されるように、学院としてのブランド力のもとに内部送出率を上げても、それを受け入れる各学校園舎がそれぞれに魅力をもたなければ、すなわち生徒・学生・保護者などに選ばれる教育機関でなければ、将来の永続的発展はないとの戒めだと理解した。

以上、「総合学園としての追手門学院」を、今後確立していくためには何が必要かという問題意識をもって、今回の視察に臨んだ。

1. 全体の行程について

訪問日時 2014年6月24日(火)～25日(水)

訪問者 学校法人追手門学院総務部審議役 吉田 浩幸
一貫連携教育研究所所員 表 弘之

18年間教員である私自身の経験から中高等学校を中心とした訪問になった。訪問校以外の情報も得たが、玉川以外は一貫教育は緒に就いたばかりという印象だ。東京ではまだ人口が増え続けていたことも背景にあると考えられる。その点、玉川は、IB、SELHi、SSHに続き、SGHの認定も受け、教育の玉川と言われる実践を積み上げていた。「総合学園としての追手門学院」を考えていく上で、まずは12年間の小中高一貫連携強化を図っていく必要があるのではないだろうか。

また、吉田審議役には日本私立大学連盟にもご案内をいただいた。審議役には、組織や経営、補助金や外部資金の獲得、税金のことなど学校経営にかかわる多くのことも教えていただいた。今後の教育活動に是非とも活かしていきたい。

成蹊学園では、成蹊史料館も訪問した。成蹊を含めた大正時代の教育の流れとあったが、総合学園としての追手門学院が今後ますます名を成し、発展すべく私自身もしっかり努力していきたい。

2. 玉川学園について

日 時 2014年6月24日(火) 13:00～15:10

場 所 玉川学園キャンパス

応対者 玉川学園中学部長・教育部長 酒井 健司

教学部長・国際交流センター長 渡瀬 恵一

教学課長 高田 恵美

(1) 総合学園としての取り組み

①小中高の12年間でどう区切るのか

小中高があれば、教育的観点や戦略的観点から、その12年間で633制ではなく、444制や、534制で区切ることも選択肢になる。当然、小中高がそろっていないと戦略のとりようもない。私立学校連盟では、ほとんどが中高しかもっていない。それでは区切りを積極的に用いる戦略がとれない。現在、小学校をつくろうとしているところがある。そこでは、区切りをどうしようかということになっている。8年前に444制をしくときは、設置基準が厳しく、保健室等は、小学生用、中高生用と二つ別々に作る必要があったが、特区申請のこともあるからなのか、今はそうでもないようだ。

②玉川学園が444制を敷くにあたって

玉川学園中学部が、444制の一貫教育を始めて8年目になる。生徒の成長は「連続的」であるのに、教員の見方は、小中高633制の「枠組み」の中でしか生徒を見られない。それを中学部一括して12年間生徒を見るということで解決しようとした。一緒に仕事を始めた頃は、小中高の文化の違いに驚きを感じた。同じ生徒の行動に対しても、小中高の先生方では、それぞれ反応・受け止め方が違った。先生はカチカチの小学校の先生、中学校の先生、高等学校の先生であった。小中の垣根、中高の垣根をどうとるのかということが大きな課題だった。小学校の先生と中高の先生と一緒に仕事をするのが大切だと考えている。

③教員免許の問題の解消法

教員免許の問題があるが、小学校5、6年生に相当する学年は、教科担任制を敷いているので、特別非常勤の免許で対応している。担任はできないが、教科は可能である。中高等学校の先生が教えると、先を見通して教えることができるので、教育効果が高い。また、玉川学園には通信制があるので、持っていない方の免許を取ってもらうこともしている。

(玉川では、教育内容が、理念にはじまり、取り組みなども非常に多岐にわたるうえ、高度な教育力を求められる。教員採用や育成をどのようにしているのかという質問に対し)教員は、玉川出身者が7割を占める。その点で理念や取り組みなどを知ったものが多い。また、常勤の先生方が5～6名いるが、他はほとんどが専任である。しかし、玉川の教育を作り上げた小原國芳に直接教育

を受けたものが減ってきているのが事実である。慶応義塾では、福沢諭吉はすでに伝説の人となっている。伝説ではよいことしか伝わらない。教育を行ううえでは「オヤジ」と呼ばれていた小原の側面も大切と考えている。

(2) 内部進学について

○玉川小学校（1学年4～5クラス 1クラス約35名 学年人数140～175名）では約10%15名程度が外部中学に進学する。玉川中学（1学年6～8クラス 1クラス約40名 学年人数240～320名）でも、約10%の30名程度が外部高校に進学する。玉川高校（中学と同規模）から玉川大学への進学率は、現在40%程度（約120名）に減った。以前は幼稚園や小学校から大学まで進学する「純玉」「貫玉」は当たり前だった。ただ、小学校から入っている生徒の70～80%（約100名）は大学まで進学する。今春IBコース2期生が卒業し、海外大学進学者が大幅に増加した。（1期生8名 2期生25名）

(3) 今後の展望について

○公立と私立は、本来的に違うと考えている。玉川の教育を受けたいという人に来てもらいたい。社会に必要な学校であれば、なくなればいいという考えだ。今は「アクションプラン2014」を実施中であるが、新たに学園教学部で将来構想として「玉川ビジョン2020」を作った。

○小学校では、もともとチャイムをやめていたが、現在これを真ん中の4年制生徒にも広げている。チャイムがなくても、時計を見て自主的に行動できている。以前は、チャイムを聞いて行動していたが、今は時間よりもはやく動くようになったので、時間前にはそろっているようだ。今後は、最後の4年制生徒にも広げたいと考えている。

○労作教育を引き継ぐ委員会活動が、放課後に現在でも行われている。教育理念をどのようにして教育活動につなげていくかが大切である。

○現在通学しているものは、最大1時間くらいかかっているようだ。東京では、東西のラインは強いが、南北のラインは弱い。そういうことも考えて募集活動を行う必要がある。

(4) その他

○追手門学院は、ワンキャンパスではないことがネックだ。英語スピーチや海外研修を一緒に行う等し、それを外部にアピールするのも一策だ。慶応義塾も立地がバラバラで、それぞれ独自にやっている印象だ。慶応の人の話では、一貫教育を行いたいと考えているが、そういう建物を作る土地がないとのことだった。人が離れているので、それぞれ独自にやっていて、一貫しにくいという状況らしい。

3. 成城学園について

日 時 2014年6月25日(水) 10:00~12:00

場 所 成城学園キャンパス

応対者 成城学園中学校高等学校 校長 石井 弘之
教育研究所 所長 白井 英之
教育研究所 主任 岩見 寿子

(1) 総合学園としての取り組み

①「オール成城」として行ったオープンキャンパス

「オール成城」と銘打って幼少中高大で一緒にオープンキャンパスを行った。これは幼稚園からのアイデアだった。一体感を外部にアピールした。こうやって成城は育てていますよというアピールが対外的にできたと考えている。ワンキャンパスのメリットもあり、沿線の電車の中吊り広告なども行った。小学校はいつも通り授業を行い、それを見てもらった。次の日を代休とした。

②教育研究所の活動

教育研究所には、事務員が2~3名と専従の主任がいる。事務員は、国立国会図書館のように資料を収集・整理している。主任は専門職で異動がない。所長は大学教授で任期が3年、所員は幼小中高で任期が2年と短く、これまでの研究活動の流れは、主任が把握している。所員は、2時間減の扱いで、毎週木曜日の午後、5、6限の時間帯に定例で会議を行っている。現在の中高校長の石井先生も30代のとき、教育研究所で編集長を任されることになり、ここで鍛えられたとの話であった。以前は情報交換程度であったが、現在は積極的に動いている。幼小中高の合同研究会も持ち回りの幹事校方式で行っている。一貫教育を行う素地は十分あるので、まさに今プラン化しようとしているところである。

③自校教育について

(教育研究所を訪れたとき、所長から) ちょうど今、追大の『自校教育の今』を参考にするために読んでいたところだった。自校教育を行ってみると、自校の歴史について、教職員が一番知らなかったというのが現実である。

(2) 内部進学について

○成城幼稚園から成城小学校には、ほぼ100% (50名) が進学する。成城中学校は男子校のため、成城小学校 (1学年3クラス 学年人数約120名) の男子 (約60名) のみになるが、ほぼそのまま進学する。成城中学校 (1学年6クラス 学年人数約240名) からは約30名が外部進学する。成績不振者が約10名、成績優秀者が約20名で、優秀者は海外の高校に進学する。この外部進学者30名分に40名分をのせた70名を高校で募集している。大学への内部進学率は約60% (学年人数

約280名のうち170名程度)だ。成城大学も追手門学院大学と同じく理系がない。そのため、生徒の私立志向が強いが、男子は他大学に進学することが多い。

○成城小学校には、伝統的に中学入試で戦える学力を鍛えるという発想がない。中学受験に対応するものは一切ない。ノビノビ個性尊重という姿勢だ。小学校には「散歩」や「遊び」という授業があるくらいだ。成績表すらない。内部では持っているが、保護者に渡すようなものはない。小学校校長も、外部説明会で、児童・保護者・教師からごく普通にあだ名で呼ばれていることを自ら話されているような学校だ。それで本格的な勉強は中学に入ってからになる。偏差値の輪切りになっていないので、成城小学校からの内部進学者には学力が非常に高いものも中に混じっている。

○高2、3生に大学の出前授業を行っている。全4学部1回ずつの4回実施である。高2の2学期当初には各学部の紹介も行っている。内部進学者をつれてきて、高校生に大学生活について話をさせている。成城学園に高校から入る生徒(約70名)は、99%成城大学を狙うが、中学から入る生徒(約180名)は、外部か成城大学かは半々である。小学校から入る生徒(約60名)は、12年間もいたので、外部へ出ることが多い。小学校の保護者には医者が多く、医学部がないことも一因かもしれない。保護者に対しては、高2、3年生の時の保護者会に学長が自ら来られて、大学の話をしている。

(3) 今後の展望について

○少子化が今後強まるなか、一貫教育をより進める必要がある。4、5年前に赴任された今の学園長が、「学園全体を見る」という話を始められて、一貫教育に関する考え方が教職員の間で変わってきた。こういう話がないと、それぞれのところで独自に行うという話になってしまう。学園長は、フットワークが軽く、幼小中高の合同研究会や部長会にも出席されている。

○國學院や都市大学付属は、内部進学を薦めていない。中高受験で名前を売る作戦である。少子化が進む中で、どういう戦略で行くかが大切だ。

(4) その他

○学習院・成城・成蹊・武蔵・甲南の五学園が私立の旧制7年制高等学校であり、今でも運動会などの交流がある。

○教員の数が多い。専任率はきわめて高く、102名のうち、専任講師は7~8名で、その他の95名はすべて専任である。理事会・法人からは減らせといわれている。成城出身者は1割くらいである。ただ、年齢構成が悪い。海外に付属高校を作っていて、それを閉鎖したためにそういう状況がおきている。

○授業は、分割で10名~15名規模のものが非常に多い。目は行き届くが、人件費の占める割合が高く、中高は大学の寄生虫といわれている。100周年記念でこの9月から中高新校舎建設が始まるが、金食い虫といわれた。募金は7年間にわたって行っている。卒業生は、あまりお金を出してく

れない。卒業生のなかでは、小澤征爾が一番有名である。中高の卒業生で、在学時はラグビー部だった。

4. 成蹊学園について

日 時 2014年6月25日(水) 14:00~16:00

場 所 成蹊学園キャンパス

応対者 成蹊学園企画室長 中村 潤

企画グループ長 塩島圭一郎

中学・高等学校教頭 横井 亮

(1) 総合学園としての取り組み

①企画室の活動

企画室では、経営企画・広報・史料館の管理・運営を行っている。現在は、ワンキャンパスの強みを生かせていない。各学校任せになっている部分が多く、法人がもっと関与していく必要があると考えている。創設者の中村春二に直接教育を受けた世代はすでに抜けていっている。創設者の中村春二の人生を描いたDVD「大正自由教育の旗手」を作った。(追手門学院もこれを参考に株式会社ボルケにお願いして「追手門の歩み」を作成している。)中村春二の教育理念や実践をどのように伝えていくかが課題である。

②小中の内部進学担当者会議

小中のミーティングが年1回行われている。教科別であったり、分掌別であったり、分科会(不登校生徒対応、保護者対応など)であったり、教頭管轄の下、研究部が主導して行っている。すべて交流会・宴会つきである。また、隔年で小中の授業を互いに見たり、球技大会を行ったりしている。理科の先生は、小中高共同の研究会を行い、自作の教材を出し合っている。これも宴会つきである。

③各校の国際教育への人材派遣

中学生のトールゼミの希望者や海外からの中高留学生、小学校の英語教育には、国際教育センターから先生を出している。徒歩で10分くらいしかかからないワンキャンパスのメリットである。

(2) 内部進学について

○大学への内部進学率は30%強くらいである。20年前は、50パーセント以上あったが、年々、下がってきている。大学への内部進学率は、どこでもだんだん落ちてきている状況だ。途中で抜けないのは、早稲田・慶応くらいではないか。明治は頑張っているかもしれない。

○小学校から中学校に進学する段階で、優秀な生徒が抜けていく状況がある。私立・公立ともに学校がたくさんあるので、地域的にここでなければならぬというのが少ない。慶応小学校に入りた

かったのに、不合格で成蹊に来たという生徒が多い。小学校6年生担任と中学校1年生担任で生徒を預かるときに、打合せの会がある。同じメンバーでその後の状況を伝えるフィードバックの会もある。うけわたしとフィードバックで年2回の会になる。

○小学6年生には前から中学校の説明会をやっていたが、小学校4年生、そして3年生へ降りてきている。塾に行く前に、中学校の魅力を伝えたい。塾には、塾の都合がある。塾の実績をあげるために、成蹊小学校の児童には、成蹊中学校の悪口を言うようだ。塾に行き始めると、指導がやりにくくなるので、その前に行く必要があると考えたためである。

○高校側からいうと、成蹊大学への進学数では中学校や塾で売れない。つまり、大学合格者実績では、早慶上智・国公立大学でないと中学受験では稼げない。役員には、大学が出来る前の人も多く、大学に進まないからといって、法人からの不満は聞かれない。大学が出来る前からの役員と後からの役員とでは、大学に対するスタンスが違うようだ。

(3) 今後の展望について

○他校との差別化が必要である。総合学園である以上、一貫教育ならではの強みがほしい。各学校間の交流がないといけない。外部的にもそういう見られ方をする。

○中高等学校は、おっとりのんびりした学校だったので、対外的な広報活動は、今まであまりかけてこなかった。ようやくオープンスクールでクラブ体験を可能にした程度である。在籍している生徒を広報活動に巻き込みたくなかったが、そうもいってられないと考えている。

(4) その他

○中高全体で教員は80人規模になる。非常勤講師以外は、すべて専任教員である。昔は、中高それぞれまったく別で、仲も悪かったが、今は中学から高校へ生徒が上がるときに、一人から二人は必ず持ち上がり、六年間見る教師がいる。中学と高校でそれぞれ文化がある。(教頭先生が赴任された)25年前よりはるかに仲良くなってきたと感じている。中学は7クラス、高校は8クラスを標準としている。中学から高校にあがるときに40名くらい外に出るので、2クラス80名くらいを高校では募集している。

5. 今後の取り組み

「総合学園としての追手門学院」の発展を考えると、一番のポイントは「人の流れ」「教育の流れ」をいかに作るかにある。伝統ある私学として教育施設の充実は当然のことであるが、学院教育理念「独立自強・社会有為」の実践こそが本丸である。追手門の教育を受けた「園児・児童・生徒・学生」を追手門学院の卒業生として社会に送り出すこと、また、彼ら・彼女たちが、現実社会で活躍することこそが教育に従事するものとしての最大の喜びである。

そのためには、生徒を目の前にしてまさに教育を行う現場の教員、それを支える職員の「意識改革」、および「組織作り」を中長期的展望に立って行う必要がある。

私自身の研究テーマの1つとして、「総合学園としての追手門学院」を目指すための具体的な提案を今後行いたい。

参考文献、資料

各学園のホームページやウィキペディア以外に下記の資料を事前学習の資料とした。

また、吉田浩幸審議役、山本直子先生からも2回のレクチャーを受けた。

○追手門学院

まんが110年志委員会『まんが110年志』（追手門学院小学校）

『百二十年志』（追手門学院小学校）

『百二十年志』（追手門学院）

○玉川学園

『玉川学園の教育活動・玉川大学の教育活動・玉川大学院の研究活動』

玉川学園 学校案内（幼稚園、小学校、中高、大学、学園 2014年度版）

○成蹊学園

みやぞえ郁雄『大正自由教育の旗手 中村春二』（小学館）

成蹊学園 学校案内（小学校、中高、大学 2015年度版）

○成城学園

成城学園六十年史編集委員会『成城学園六十年』（成城学園）

成城学園 学校案内（小学校、中高、大学、学園広報 2011年度版）

○その他

平生漫画プロジェクト『マンガ 平生^{はち}眞三郎』（幻冬舎）

立命館一貫教育部訪問 報告書（山本直子先生とりまとめ）

関西大学訪問記録（相馬すみひこ先生とりまとめ）